

質疑応答

司会：徳丸 吉彦

＜研究発表＞ 「台湾における日本の学校唱歌の教育－1895-1945年の間に見られる唱歌教育の受容－」

劉麟玉

問：熊谷圭知（お茶の水女子大学）

日本の植民地化を考える時、日本のナショナリズムを強化する側面と、グローバルなスタンダード、即ち西洋化の側面という矛盾し対立する2つの側面が絡み合っ出てくると言える。今回の発表では、音・メロディーが西洋音楽である点に特に注目していたが、歌詞のメッセージとの関係はどうか。日本の唱歌の歌詞は日本のナショナリズムと結びついているが、これは台湾人にとっては異文化である。彼らはどういう気持ちで歌ったのか。例えば、「お祭日」は歌詞は日本人、作曲は台湾人だが、メロディーの新鮮さに引かれて歌ったのか、それとも歌詞の受容あるいは反発を感じて歌ったのか。

答：劉麟玉

「お祭日」は1929年に発表された曲で、作曲、歌詞ともに台湾から公募した。その内容は台湾の風物・風土とかがわりあるものが要求された。この曲は祭りの情景を描いた作品なので、親しみ易い。

問：三橋広夫（中学校社会科教諭）

現在、台湾の中学校では卒業式に「仰げば尊し」を歌う。多分、植民地時代は日本語でこの曲を歌っていただろう。現在でもなお歌われているという連続性の部分と、歌詞が変わったという断続性についてききたい。

答：劉

2.28事件以後、日本の歌は禁止されたが、「仰げば尊し」は作曲者不詳のため、使用することができた。戦後は教材不足ということから、小学唱歌のうちメロディーが西洋音楽の曲は歌詞を変えて歌われた。歌詞は翻訳されたが、意味は同じである。

問：山口誠（東京大学）

台湾における国語教育について研究している。日本語教育と唱歌教育の関係がどうであったのか。1929年以後、台湾放送協会による国語教育の講座の中で「唱歌・音楽の時間」があつて、音楽を日本語で覚えるプログラムがあつた。学校教育の場ではどうであったのか。

答：劉

最初の段階では教育上の目的として、日本語力のアップを図ったが、次々と日本から音楽教師が来るうちに、鑑賞へと変わった。つまり国語教育よりは芸術教育として考えられるようになった。

問：徳丸吉彦

現在、小学校は北京語で教わるのか。

答：劉

そうだが、小学校には台湾語の授業がある。5年前、高校の合唱コンクールの歌詞は台湾語に限定されていたという記憶がある。

問：三橋

日本の歌が禁止された後、「仰げば尊し」を歌い続けていくことは、2.28事件を起した国民とレジスタンス的なものがあったのか。それとも他に曲がないからか。

答：劉

国民党の教育プロセスはよくわからない。卒業式に何を歌うかは教育の中で規定されておらず、学校自体で決める。わたしは「蛍の光」を歌った。

<研究発表> 「日本音楽におけるジャンルの相互関係ー長唄を例にしてー」 小塩さとみ

問：永原恵三（お茶の水女子大学）

他のジャンルとの具体的な交流の場、きっかけーなぜそのようなことがおきるのかという契機が、実際に演奏する人たちの営みの中で、曲の成立の中で、どのように起きるのか伺いたい。

答：小塩さとみ

長唄が長唄以外のジャンルの様式をよく取り入れた理由として、歌舞伎が2つの演奏の場を持っていたことが挙げられる。1つは歌舞伎の場で、常時、常磐津節、清元節、竹本と呼ばれる義太夫節が演奏されたので、他のジャンルを同じ空間で聴くチャンスがあった。もう1つは長唄の世界に、江戸時代後期になると演奏する場が、お座敷、お屋敷というような演奏会場で実験する場ができた。他に、やはり唄は町中で聴けた。能の場合は、初期は武家の二男坊、三男坊が長唄の世界に転職した際に、何らかの情報を持ってきたと想像される。2次大戦以後になると、能楽と長唄界の人たちが少しずつ交流ができ、長唄の囃子の人が能の囃子の人に習いに行き、長唄の囃子が能の影響を受けて変わったという記録がある。

<研究発表> 「身体表現としての仏舞研究」 遠藤綾乃

問：アン・ウォルソール（カリフォルニア大学アーヴァイン校）

舞いをするのは皆、男性か、観る人はどうか。男女の役割の区別についてききたい。

答：遠藤綾乃

今回7地域の調査をしたが、舞いは全て男性であった。日本の伝統芸能では男性が伝承組織の中心であるため、そのことに関しては特に気になかったが、仏教思想との関係も絡めて、今後考えていきたい。また、観る人は1つめのビデオ（松尾寺）では、山の奥深くにあるため、一般の人ではなく、その宗派の人や檀家の人で、男女どちらでも可能である。2つめの田峰の仏舞の場合は、覗き見するという形のため、観客の設定はされていない。

問：朴善姫（お茶の水女子大学）

韓国では動きの多いものから少ないものまで、色々な種類の仏舞があるが、他の仏舞とはどう違うのか。先ほどの動作はどういう意味を持ち、どんな流れの儀式か。シャーマン的な儀式をするのか。

答：遠藤

回転や跳躍運動が見られない、スタティックな舞踊は全てに見られる。今回の分析結果から、上肢を使う動きと体幹を主に動かすものの2つに大別された。

問：朴

人間が仏になるための仏舞のプロセスの中に、トランス状態になるような場面はみられるか。

答：遠藤

韓国のシャーマン的な動きのような、厳格な儀式は見られなかった。舞人は体を清めてから仮面をつけ、仏舞をする。その流れとして、踊りの前後に僧侶による声明や御詠歌を詠じる、としか今は言えない。

問：原郁子（お茶の水女子大学・院）

仏舞は上肢の動作が重要であり、仏像や仏の絵との関係を言っていたが、ある仏舞のポーズが特定の信仰する仏像や基になった仏像の典拠はみつけれられるか。

答：遠藤

舞踊動作の中に仏の性格が明確に現れているかは、疑問に思える分析結果であった。仏像や絵画は寺に保存されているわけではなく、いつどこから伝承されたかという記録もはっきりわからない。現在、残っている形として明確な意味を読み取ることはできなかった。

司会者のまとめ

徳丸 吉彦

この分科会でも3人の方に発表してもらいました。

最初の発表は台湾からお見えになった劉さんで、台湾で音楽教育が日本の植民地時代にどのように行なわれていたか、という研究です。これは大変面白いと同時に大変悲しい話でして、植民地化したのだったら日本文化を輸出すればいいじゃないか、というのが私の考えですが、日本人はそういう事をしないで、西洋から受け入れた学校唱歌を、つまり西洋音楽を台湾に持っていった、といういきさつが明らかになりました。これは日本音楽が日本の国内だけではなくて、海外でも実践されている例になります。ですから、例えばブラジルの日系人の方の日本音楽の研究もそうですけれども、ビルマの中で、なぜ日本の軍歌が今でも使われているか。そういう具合に、日本の外での日本音楽の研究に対する貢献になるだろうと思います。

次の小塩さんの発表は、長唄という三味線音楽を例にして、いかに長唄が他の音楽のイメージを利用し、それと同時に他の音楽そのものも利用しているかを考察したものです。別の言い方をすると、長唄というのは他の音楽ジャンルと豊かなネットワークを持っている、ということを明らかにしたものです。これは社会学の理論をご存じの方には、非常に異様に聞こえるかもしれませんが。なぜなら中根千枝さんが『タテ社会の人間関係』というのを書いて、特に英語の版やフランス語の版を作る時に、そこにパフォーマンス・アーツの項目を追加し、日本人のパフォーマンス・アーツはみんなジャンル別にやって、一緒にやらずに相互関係がないということを力説したからです。また、丸山真男さんが『日本の思想』の中で、日本文化というのはみんな蛸壺のように分離していて、ささら型の西洋文化とは違うというモデルを提出しました。これは日本音楽の専門家の間では事実と違うということが明らかなんですが、そのこ